ブンさんの骨

あらすじ

恋人である『ブンさん』を突如亡くした山本雪。勘当された一の遺骨は行方知れずとなり、雪の手元に渡ったのは、ふとしたきっかけで涙を誘う遺骨を食べようという文一の思い突然の感情が溢れ出す。が、文一の死に直面した雪は、改めて『ブンさんの骨』の生活が始まる。そこから雪と『ブンさん』を突如亡くした山

パスワードの友人かパソコンを使おうとするが古くからの本田陽太にパスワードが分からない。文一のパソコンを開くと、何も得られず途方にくれる。

過去を振り返ると、文一の高校時代の同級生だった文一。雪は付き合ったことを何も知らない。

一緒に暮らしていた文一の死を知らせる電話が鳴り、雪は慌てて実家へ帰る。

ゲイバーで知り合ったこの失踪の意外な暴露。

そこに訪ねてきた佐藤と名乗る男は、文一の生活を調べ上げ、文一の過去を吐き出す。

そんな中、知らない女性が現れ、文一の死を巡る真実が明かされる。

雪は、文一の遺骨を引き取りたい真意を語る。

本田安が募り、文一と離れ離れになった文一は、

不安が疎かになる。

ある日、文一のパソコンを使おうとするが、パスワードが分からない。

文一の遺骨を引き取りたい真意を語る。

そこに、この小説がアルバイトとして家賃を稼ぐ

雪は本田とともに、文一の遺骨を渡すことを決断する。雪は『ブンさんの骨』と別れたのだった。そして春、雪は文一と暮らした部屋を引っ越す。だがその表情は明るかった。

登場人物表

山本雪（２４）小説家

本田陽太（２７）文一の友人

松永富美子（７２）大家

ハル（２７）文一の高校時代の同級生

佐藤進（５８）文一の伯父

神田章弘（４２）編集長

葉山智希（２６）雪の担当編集者

松永英二（１７）富美子の孫

国塚（４８）弁護士

店長

雪（N）「ブンさんが死んだ」

○商店街

ガヤガヤと騒がしい人だかり。

ある箇所に野次馬たちが注目している。

男の声「救急車、救急車！」

男の声「今来ました！」

バタバタと慌ただしい人々。

八百屋から女、出てきて、

女「やだ、何？」

女「急に倒れたって」

男「ありゃもう心臓止まってるだろ」

救急車のサイレンの音が近づいてくる。

雪（N）「そして」

○アパート・雪の部屋（夕）

喪服の山本雪（24）、入ってくる。

ドアをバタンと閉め、そのままもたれかかる。

黒いハンドバックと紙袋、そして白い骨壷を抱えている。

遠くを見つめる雪。

雪（N）「骨になった」

○タイトル

『ブンさんの骨』

○アパート・雪の部屋（夕）

雪、だるそうにパンプスを脱ぐ。

雪「痛……」

雪、ハンドバックと紙袋を床に放り投げる。

骨壷をテーブルの上に置く。

雪「あー、疲れた」

仰向けに寝転がる雪。

天井を見てため息をつく。

雪「（気づいて）あっ」

雪、ポケットを弄る。

雪「塩、塩」
雪、玄関に這って向かう。
雪「うぐぐ……」
雪、必死で前に進もうとするが上手く進めない。
ふとテーブルの骨壷を見て、
雪「……ま、いっか。ブンさんだし」
雪、寝転がってテーブルに向かう。
が、ふと思いとどまって、
雪「でもやっぱ……。ふんっ！」
雪、力を込めて立ち上がる。
慌てて玄関に向かう。
雪「他の人連れて来てたらやだし」
雪、パンプスを履きドアを開け外に出る。

○同・玄関前（夕）
雪、出てくる。
子供達の声が聞こえる。
雪、深呼吸をする。
ポケットから塩を取り出し、封を切る。
ふと横を見ると、松永富美子（72）が立っている。
雪「あ、富美子さん。こんにちは」
富美子、心配そうな顔で近寄ってくる。
富美子「……行って来たのね」
雪「はい」
富美子「ごめんなさいね。私も行けたら良かったんだけど、足がどうもね」
富美子、膝をさする。
雪「あー、いいですよ。なんか向こうの知り合いしかいなくってアウェーな雰囲気だったし。行かなくて正解です」
富美子、雪の手を取りさする。
不思議そうに富美子を見る雪。
富美子「雪ちゃん。この度は……」
富美子、涙がこみ上げてくる。
雪「富美子さん」
雪、慌ててポケットからティッシュを差し出す。

富美子「ごめんなさい、ごめんなさいね。私が泣いちゃうなんて……」

富美子、雪の手を強く握る。

富美子「雪ちゃん、気をしっかりね。今は辛いと思うけど、時間が慰めてくれるから」

雪「（困惑して）は、はぁ……」

富美子「一人で悩まず、何でも話すのよ？こういう時は人を頼っていいんだから」

雪「あ、じゃあ……」

富美子「うん？」

雪「塩、かけてもらっていいですか？」

○同・雪の部屋（夕）

雪、入ってくる。

肩を手で払う。

パラパラと少量の塩が落ちる。

パンプスを脱ぎ、匂いを嗅ぐ。

うんうんと頷く。

靴箱から消臭スプレーを取り出し、パンプスにかける。

骨壷の置いてあるテーブルの前に座る。

コンコンと骨壷を指で弾く。

蓋を開け中を覗く。

クンクンと匂いを嗅ぐ。

雪「ふぅん」

蓋を閉じる。

雪「さて、と」

雪、台所に向かう。

冷蔵庫を開け中を覗く。

水や調味料しか入っていない。

雪、お腹をさする。

雪「んー……」

雪、冷蔵庫を乱暴に閉める。

骨壷のあるテーブルに戻ってくる。

じっと骨壷を見つめる。

蓋を開け中を覗く。

じーっと中を見つめる。

雪「……食べようかな」

雪、骨壷の中に手を入れ弄る。

雪「んーと、これ！」
雪、骨壷から遺骨のかけらを取り出す。
まじまじと見つめる。
クンクンと匂いを嗅ぐ。
雪「んー……」
雪、遺骨を骨壷に戻す。
カバンを開け、スマホを取り出す。
雪「こうゆうの食べても平気なのかな……」
雪、スマホをいじる。
検索アプリの画面。
雪「えーっと」
雪、『骨』『食べる』と入力する。
『魚の骨は体にいい？　食べても平気？』『栄養たっぷり！　魚の骨は食べるべき！』『骨まで食べれる魚は？』
などの検索結果が出てくる。
雪、頭をかく。
雪「そーじゃなくて……。えーっと」
雪、骨壷を指を弾く。
ハッとして、『遺骨』と入力する。
指が検索ボタンに触れる。
雪「あっ、やば」
雪、慌てて『遺骨』の後に入力しようとする。
画面には『遺骨』の検索結果。
『遺骨とは？　亡くなった人の骨のこと』と検索トップに出ている。
それを見た雪、指が止まる。
骨壷に目を移す。
震えている雪の手。
目に涙を浮かべる雪。
雪「う、うわあああ！」
堰を切ったように涙を流す雪。
雪「ああああああ！」
雪、自分の太ももを殴る。
雪「ブンさっ……。あああああ！」
テーブルの上にある骨壷。
雪「ああああああああああああ！」
わんわん泣く雪。

○同・玄関前（夕）

雪の泣き声が漏れ聞こえる。

雪（N）「結局、病気とか何とか書いてあって怖かったので、骨を食べるのはやめた」

○同・雪の部屋（朝）

スマホのアラームが鳴る。

布団で寝ている雪。

雪「んー……」

寝たままの雪、スマホに手を伸ばしアラームを止める。

伸びをして起き上がる。

枕のそばを見て、

雪「おはよ、ブンさん」

枕元に置いてある骨壷。

×　×　×

着替えた雪、パンを食べている。

テーブルの上に置かれた骨壷。

×　×　×

歯磨きをしている雪。

そばに置かれている骨壷。

歯ブラシの水滴が骨壷に飛ぶ。

気づいた雪、袖で骨壷を拭く。

×　×　×

雪、スニーカーを履く。

雪「行ってきまーす」

雪、出て行く。

鍵を閉める音。

テーブルの上に骨壷。

○出版社・社員食堂

昼時で混雑している食堂。

一人席でうどんをすする雪。

神田の声「山本さん」

ビクッとする雪。
むせて慌てて胸を叩く。
振り返ると、神田章弘（４２）立っている。
雪「（咳き込みながら）神田さん」
神田「あー、ごめんごめん」
神田、テーブルに置いてあった水を差し出す。
雪「すみません」
雪、水を流し込む。
雪「すみません、まだ打ち合わせに時間あったんで昼食べてたんですけど……。え、一時半ですよね？！」
雪、慌てて周りをキョロキョロ見渡す。
壁時計は十二時四十分。
神田「そうだよ、一時半」
雪「びっくりした……。やらかしたのかと」
雪、うどんをすする。
神田「昼ここかなーと思って。やっぱ当たってた」
神田、雪の隣の席に座る。
雪「下手にカフェ入るより安いんで」
神田「だね」
雪「神田さんは？　今日社食なんですか？」
神田「あー」
雪「奥さん弁当作ってくれなかったんだ」
神田「（気まずそうに）あは。昼はもう食べたんだけど」
雪、うどんをすする。
神田「……なんかデザートとか食べる？」
雪「えー、ヨーグルトですか？」
神田「なんか他のでもいいけど」
雪「え？」
神田「奢るよ」
雪「いいんですか？」
神田「いいよ」
雪「やったー。じゃ、チョコサンデーで」
神田「了解。ちょっと待ってて」
雪「やったぁ」
神田、立ち上がる。

雪「どういう風の吹き回しですか？　奢ってくれるなんて」
神田「まぁ、な。たまにはな」
雪「えー、なんかこわーい。打ち切り？　打ち切り？」
神田「（笑って）違うよ」
雪「紛らわしいことやめてくださいよー」
神田「……甘いもの食って欲しいから」
雪、神田の顔を見る。
神田、食券機に向かう。
雪「……」
雪、神田の背中を見たままうどんをする。

○同・会議室

向かい合って座っている雪と神田。
葉山智希（２６）、入ってくる。
葉山「失礼します」
雪「お疲れ様です」
神田、葉山を指して、
神田「話していた葉山」
葉山「葉山です！　よろしくお願いします！」
雪「よろしくお願いします。山本で――」
葉山「雪山先生のデビュー作、大好きなんですよ！」
雪「あ、ありがとうございます……」
葉山「いやぁ、先生の担当になれて本当に嬉しくて！」
雪「あの、先生なんてやめてください……。小っちゃい雑誌の月一連載しか持ってないんですから」
神田「小っちゃい言うな」
雪「あ、すみません」
葉山「雪山先生はこれからもっと来ますよ！　僕と一緒に頑張りましょう！」
葉山、雪の手を強く握る。
雪「えっと、あ」
雪、神田をチラチラ見る。
雪「よろしくお願いします？」
神田「……まぁ、葉山は移動してきたばかり

だけどほら、見ての通りやる気はすごいから。ね」

葉山「はい！」

雪「あは、あはは……」

神田「最初のうちは慣れるまで俺も打ち合わせに参加するし」

雪「（ホッとして）はい」

神田「じゃあまず今やってる連載の今後の展開を……」

葉山「あの！　雪山先生にご提案が」

雪「て、提案？」

雪、不安そうに神田の顔を見る。

眉をしかめて葉山を見る神田。

葉山「エッセイとか書いてみませんか？」

雪「エッセイ？」

葉山「はい！　最近売れてるんですよ。作者の非日常的な体験をありありと綴ったエッセイ漫画が！」

神田「漫画？」

雪「あ、えーっと、これでも小説家の端くれでして……」

葉山「だから！　この流れが文芸界にも来るんですよ！」

神田、目を瞑る。

雪、神田を見て、

雪「（ボソッと）あ、ダメだ」

葉山「雪山先生の新境地、開いてみませんか？」

雪「みませんかって……。いやぁ、私は平凡な人間ですから、人様に面白がられるようなエッセイはとても……」

葉山「先生、最近恋人を亡くされたんだとか」

雪「は？」

神田「（慌てて）おいっ！」

葉山「お辛いでしょう……。その思いを！　文字に吐き出してみませんか？」

葉山、身を乗り出す。

葉山「きっと天国の彼氏さんにも届くと思うんです！　その純愛が！　読者の心にも響いて」

神田、慌てて葉山を抑えつける。

神田「悪い、こいつ……」
雪「あー、せっかくだけどお断りします」
雪、顔をかく。
雪「自分、ファンタジーしか書けないので」

○アパート・雪の部屋（夕）

雪、入ってくる。
雪「ただいまー」
テーブルの上にある骨壷。
雪「（微笑んで）ただいま」
雪、靴を脱ぎテーブルに向かう。
骨壷の前に座る。
雪「くっそー、葉山の野郎」
雪、骨壷にもたれかかる。
雪「いっちばん苦手なタイプだわー。神田さんも違う人後任にしろよなー」
コツコツと骨壷を弾く雪。
雪「私はファンタジー専門だっての。ファンだって言うならちゃんと読んどけ」
雪、骨壷を指で撫でる。
雪「エッセイなぁ……」
雪、頬杖をつく。
雪「ファンタジーっぽいのなら書ける気がするけど……」
雪、骨壷をペタペタ触る。
雪「んー、例えば……」
雪、骨壷を指で弾く。
雪「ブンさんが幽霊になって現れるとか」
雪、骨壷の蓋を開け中を覗く。
雪「ブンさーん」
しんと静まり返った部屋。
雪「あはは……」
雪、蓋を閉め寝転がる。
そっと目を閉じる。

× × ×

薄暗い部屋。
男の声「……雪……」
眠っている雪。

雪「んー……」

雪、ボリボリとお腹をかく。

男の声「……雪……」

雪「うん？」

雪、目を覚ます。

天井をぼーっと見る。

男の声「雪……」

声を聞き目を丸くする雪。

ハッと飛び起きる。

玄関の方を見ると窓に人影。

雪「あ……」

雪、慌てて玄関に向かう。

裸足のまま勢いよくドアを開ける。

雪「ブンさ――！」

ドアの前に立っていたのは松永英二（17）。

ぎょっとした顔で立っている。

雪「あ……」

野菜の入った段ボールを抱えている英二。

英二「こ、こんちはっす、雪さん」

富美子、ドアの陰から顔を覗かせる。

富美子「あ、雪ちゃん」

雪、英二と富美子の顔を交互に見る。

雪「あ、あはは……」

富美子「孫が野菜持って来てくれたからね、雪ちゃんにもおすそ分けって思って」

英二「ピンポン壊れてたみたいなんで外から声掛けさせてもらいました」

雪「ごめんなさい、寝てて……」

雪、慌てて髪を手櫛で整える。

富美子「雪ちゃん……」

富美子、雪の手を取る。

富美子「辛いなら無理しないでいいのよ」

雪「え？　いや、私は何も……」

富美子「さっきも文一くんを呼んで……」

雪「あっ、いやぁー、なんか夢を見てね？　それで、それでです！」

富美子「雪ちゃん」

富美子、雪を抱きしめる。

富美子「分かるわ。私もお父さんを亡くしたときしばらくはね、信じられなかったの。でもね、時間が解決してくれたわ」

富美子「ゆっくりでいいの。ゆっくりで」

抱きしめられされるがままの雪。

雪「あ、えっと……」

気まずそうに俯いている英二。

涙を浮かべ雪の背中をさする富美子。

雪「はい……」

（N）「そうか、私は」

×　×　×

雪、段ボールを床に置く。

（N）「ハタから見れば彼氏を亡くしたかわいそうな人なのか」

雪、骨壷の前に座る。

じーっと骨壷を見つめる。

雪「よく考えりゃ、ブンさんはさ、幽霊になんないよね」

雪、へラっと笑って、

雪「だってブンさん心霊系超苦手だもんね」

微笑む雪。

雪「明らかに嘘の心霊番組にもギャーギャー言ってさ」

雪、頬杖をついて骨壷を見つめる。

雪「それにさ、幽霊になんてならなくても側にいるもんね。こうやって、側にいてくれてるもんね」

雪、骨壷を撫でる。

○家電量販店・店内

PCコーナー。

修理のカウンターにいる雪。

カウンターの上にはノートパソコン。

店員「ではお預かりしますね」

雪「はい」

店員「お渡しは二週間後になります」

雪「二週間」

店員「お受け取りの際はお客様控えお持ちください」

雪「はい。よろしくお願いします」

○アパート・雪の部屋

買い物袋をさげた雪、入ってくる。

雪「ただいまー」

テーブルの上に骨壷。

雪「修理二週間かかるってさー」

雪、冷蔵庫を開け買い物袋の中身を移す。

雪「うー、ネカフェ行くしかないのかぁ」

雪、カバンからお客様控えを取り出す。

雪「無くしそう……。ブンさんちょっと持って」

雪、お客様控えを骨壷の下に挟む。

雪「無くさないでね？」

雪、立ち上がり戸棚を見る。

雪「会員証どこやったかな」

雪、次々棚を開けて見る。

雪「無いな……」

雪、ウォークインクローゼットに手を伸ばす。

雪「こっちだ」

雪、ウォークインクローゼットの中を見渡す。

ノートパソコンがある。

雪「あ」

雪、ノートパソコンを取り出す。

ステッカーが貼られているパソコン。

雪「ブンさんのがあるじゃーん」

雪、ノートパソコンをテーブルの上に置く。

雪「私天才」

雪、骨壷に手を当てる。

雪「ブンさんちょっと借りるね」

雪、ノートパソコンを開く。

電源ボタンを押す。

サインイン画面。

『パスワードを入力してください』と

出ている。

雪「あー、パスワードか……」

雪、しばらく画面とにらめっこする。

『password』と入力する。

『パスワードが違います』と出てくる。

『1234』と入力する。

『パスワードが違います』と出てくる。

雪「うーん……」

頭をボリボリかく雪。

○デパート・フロア

奇抜な洋服を着たマネキンが並べられている。

中央にランウェイ。

慌ただしく準備しているスタッフたち。

色とりどりの照明がついたり消えたりする。

スタッフと話している本田陽太（27）。

本田「あそこはもうちょっと照明落として」

バイブ音。

本田、ポケットからスマホを取り出す。

本田「ちょっとごめん。それよろしく」

スタッフ「はい」

スタッフ、小走りで行く。

本田、電話を取り、

本田「おい、雪！」

○アパート・雪の部屋

雪、思わず耳からスマホを離す。

本田の声「お前なぁ、返信しろよ！」

雪、渋々スマホを耳に当てる。

雪「あー、ポンさん？　こんにちはー」

本田の声「どんだけ心配してると思ってんだよ」

雪「ごめんなさーい。でも既読はつけてるじゃないですか」

本田の声「文字打てよ」

雪「えー」

本田の声「何で返信しないんだよ」

雪「だってポンさんの使う絵文字なんかムカつくんですもん」
本田の声「あぁ？」
雪「あはは」

○デパート・フロア
本田、ためいきをつく。
チェックしながら会場を歩き回る。
本田「で、どうした？　電話してきて」
本田、マネキンの服を整える。
本田「俺からのメールは全然返信しないくせに」
雪の声「あー、今ブンさんのパソコン使おうと思って」
本田、立ち止まる。
本田「ブンの？」

○アパート・雪の部屋
雪「パソコン壊れたんですよ。今修理出して仕事できないから、ブンさんのでいいやって思って引っ張ってきたんですけど」
雪、『0』を連打する。
エンターキーを押すが『パスワードが違います』と出てくる。
雪「パスワードがね、分かんなくて」
雪、デタラメにキーボードを叩く。
『パスワードが違います』と出てくる。
雪「ブンさん携帯にもロックかけなかった人だから全然分かんなくて」
雪、人差し指でキーボードを打つ。
雪「ポンさんならなんか知ってるかなーって」
本田の声「……やめとけ」
雪「え？」
本田の声「ブンはパソコンにはロックかけてたんだろ？　だったらお前が開いていいものじゃない」
雪「（ムスッとして）……何でですか」

○デパート・フロア
本田「友達、いや男として全力で止める！」

真剣な表情の本田。

○アパート・雪の部屋

雪「……」

○デパート・フロア

雪の声「……開けまーす」

本田「おい！」

雪の声「なんかパスワード思い出したら教えてください」

本田「おい、絶対止めろよ？　いいか？　絶対――」

電話が切れる。

本田「雪？　雪？」

スタッフの声「本田さん」

本田「うん？」

スタッフの声「ちょっといいですかー？」

本田「あー」

本田、スマホとスタッフを交互に見る。

スマホをポケットにしまい、

本田「どうした」

本田、駆けていく。

○アパート・雪の部屋

雪「パスワードなぁ……」

雪、パソコンの画面をじーっと見つめる。

『パスワードを忘れたら』をクリックする。

『ヒント：lover』と出てくる。

雪「……ろばー？」

雪、スマホを手に取りいじる。

雪「ラバー……。恋人。……ふーん」

ニヤつく雪。

骨壷を指で弾く。

雪「ふーん」

雪、『yuki』と入力しエンターキーを押す。

立ち上がり冷蔵庫に向かう。

ペットボトルを取り出す。

飲みながらテーブルに戻る。
パソコンの前に座る。
画面には『パスワードが違います』と出ている。

雪「え」
雪、『yuki』と入力しエンターキーを押す。
『パスワードが違います』と出てくる。
雪「えぇー……。あっ」
雪、『0812』と入力する。
『パスワードが違います』と出てくる。
雪「……はぁ？」
雪、骨壷を睨む。
姿勢を正してキーボードを打つ。
『yamamotoyuki』と入力する。
『パスワードが違います』と出てくる。
『yukiyama』と入力する。
『パスワードが違います』と出てくる。
『yukiyamamoto』と入力する。
『パスワードが違います』と出てくる。
雪「えー……」
雪、骨壷を見つめる。

○同・玄関前（夜）
本田、ビニール袋をさげてチャイムを押す。
反応がない。
本田「雪ー？」
本田、ドアをノックする。
反応がない。
本田、ドアに耳を当てる。
ノックして、
本田「おーい、雪ー」
ドタドタと足音が聞こえる。
鍵が開く音。
ドアが開く。
本田、慌ててドアから離れる。
雪、ドアから顔を覗かせる。
本田「よっ」
雪、真顔になって、

雪「……名乗ってから呼んでくれません？」
本田「は？」
雪「いえ、別に」
本田「飯、食った？」
本田、ビニール袋を掲げる。

○同・雪の部屋（夜）
コンロに向き合っている本田。
雪「仕事だったんですか？」
雪、テーブルを拭いている。
本田「そう。アパレルの展示会でな。演出担当することになったから」
本田、コンロの火を止める。
火にかけていた鍋を持ちテーブルに向かう。
本田「ほいほい」
雪、テーブルの上にタオルを置く。
本田、鍋をテーブルの上に置く。
雪「鍋」
本田「『ポン鍋』。うまいよー？」
雪「季節感ゼロですね」
本田「鍋はいいぞ、鍋は。いっぺんに栄養が取れるからな」
本田、小皿に取り分ける。
本田「ほらいっぱい食え」
雪「はいはい」
雪、箸を持つ。
本田「ちゃんと食ってたか？」
雪「それなりには。いただきまーす」
本田「ならいいけど」
雪、食べ始める。
雪「あー、うま」
本田「だろ」
本田、食べ始める。
雪「久しぶりに食べました。『ポン鍋』」
本田「昔よく食わせてたからな」
本田、チラッと壁際に目を移す。
ひっそりと置いてある骨壷。
見つめる本田。
雪「うまいなー」

本田、骨壷から目をそらす。

本田「で、パソコンは？」

雪「え？」

本田「パスワード、分かった？」

雪「あー……」

雪、箸を置く。

本田「え？　何」

雪「ぜんっぜん分かりませんでした」

本田「まぁ開くなってことだろ。うちに使ってないやつあるから持ってこようか？」

雪「変なデータ抜きました？」

本田「抜いたよ！　てかもと入ってねぇよ！」

雪「ブンさんのも入ってたんですかねぇ」

雪、骨壷を見る。

本田「ま、まぁ、ブンも男だし、いろいろあるだろ」

雪「ポンさんがいろいろあるのは分かるんですけど」

本田「おい」

雪「……パスワードのヒントがね」

本田「ヒント？」

雪「出てくるじゃないですか。パスワード忘れたらって」

本田「あー、秘密の質問的な」

雪「『lover』って出てきたんですよ」

本田「ラバー？　あ、恋人か。それなら」

ハッとする本田。

雪「フルネームもペンネームも誕生日も身長も、ダメでした」

本田、黙々と食べる。

雪「二人の記念日とかも、ダメでした」

もぐもぐ食べる本田。

雪「……昔の女のですかね」

本田、雪と目を合わせない。

雪「ポンさん何か知りません」

黙って食べ続ける本田。

雪、本田の顔を覗き込む。

目を合わせようとしない本田。

雪「友達だから、知ってますよね？　その辺」

本田「わ、分かんないなー」

雪「ポンさん？」

本田「し、知らないよー」

雪「ブンさんってモテてたらしいですね」

雪、本田に顔を近づける。

目が泳ぐ本田。

本田「――っそこらへんはもういいだろ！」

雪「えー」

本田「雪だって聞きたくないだろ？」

雪「うーん」

本田「昔のことは昔のことでさ。それでいいだろ」

雪「生きてる人はそれでいいかもしれないけど、もう聞けないじゃないですか」

雪、骨壷を見る。

雪「聞いとけばよかったかな。ブンさんのこと、いろいろ」

本田「……ブンも自分のこと話すタイプじゃないからな」

雪「そうですけど」

雪、骨壷を見る。

雪「私、ブンさんのこと何も知らないんですよね」

本田「……」

雪「知らなかったんですよね」

○出版社・会議室

葉山「この間は本当に申し訳ありませんでした」

葉山、雪に頭を下げる。

雪、神田を見る。

神田「よく言っといたから」

雪「あ、はい」

葉山「神田さんにも言われた通り、本当に無神経でした」

雪「まぁ、はい。もういいですよ。ね」

葉山「雪山先生にエッセイを勧めるなんて」

雪「は？」

神田「葉山？」

葉山「雪山先生のファンタジーは傑作なのに

……。それを真逆のエッセイを勧めるなんて！　編集としてあるまじき行為でした」

雪「そっちかー……」

神田、頭を抱える。

葉山「二度と、このようなことがないようにします！」

葉山、雪の手を取る。

葉山「これからもよろしくお願いします！」

雪「は、はぁ……」

にこしている葉山。

×

×

×

向かい合って座っている雪と神田・葉山。

葉山、パソコンを見ている。

葉山「ん？　このデータは……？」

神田、パソコンを覗いて、

神田「こっちだよ」

葉山「あー、はい！」

雪「……葉山さんっていくつなんですか？」

葉山「僕ですか？　今年二十七になります！」

今二十六ですけど」

雪「へー。二十七……」

神田「どうした？」

雪「あー、葉山さんに一個聞いてもいいですか？」

葉山「はい？」

雪「葉山さんって今まで何人と付き合ったんですか？」

葉山「そういうプライベートな話、ズケズケ聞くのはどうなんでしょ」

葉山、首を傾げる。

目を開いて葉山を見る雪。

神田の方を見る。

頭を抱えている神田。

葉山「どうしたんですか、急にそんなこと聞いて」

雪「あー……。葉山さんくらいの年齢って普

通どんくらいなのかなーって」
葉山「作品に何か関係あるんですか？」
雪「あー、はい」
葉山「五人です」
雪「五人……」
葉山「ちなみに今は半年付き合ってる彼女がいます」
雪「へぇー。まぁそれはどうでもいいんですけど」
雪、座り直す。
雪「周りの人も大体五人とかですか？」
葉山「んーー、そうですね。僕の友達とかも大体それくらいでしたかね」
雪「へぇー……。彼女に元カノの話とかしますか？」
葉山「今の彼女に？」
雪「はい」
葉山「えー、しませんよ。そんな無神経なこと」
雪「無神経」
葉山「まぁ聞かれたら話しますけどね」
雪「聞かれなきゃ話しませんか？」
葉山「はい、もちろん。自分から話すようなことはしませんよ」
雪「ふーん……」
神田、不思議そうに雪を見る。

○アパート・雪の部屋（夜）
雪、入ってくる。
雪「ただいまー」
雪、テーブルの上の骨壷に駆け寄る。
雪「ブンさーん」
雪、骨壷に頬をくっつける。
雪「あー、冷たくて気持ちいいー」
雪、骨壷を撫でる。
ふと手が止まる。
雪「……ブンさん。ブンさんって、あの……」
外から話し声が聞こえる。
雪、玄関の方を見る。
本田の声「とりあえず急には無理だからさ

「……」

雪「ポンさん？」

雪、立ち上がり玄関に向かう。

本田の声「あとで俺が話しとくから――」

雪、ドアを開ける。

と、立っている本田。

本田「（驚いて）ゆ、雪！」

雪「どうしたんですか？」

本田「あ、いや、ちょっと」

本田、慌ててドアを閉めようとする。

雪「何すか」

ぐっと後ろから本田の前に立ちはだかるハル（27）。

金髪のロングで丈の短いワンピースを着て、ピンヒールを履いている。

ぎょっとする雪。

雪を睨みつけるハル。

本田「ごめん、こいつブンの――」

ハッとしてハルを見る雪。

キッと雪を睨んでいるハル。

雪、ごくりと唾を飲み込む。

ハル「（野太い声で）あんたがブンちゃんの彼女？」

雪「（拍子抜けして）へ？」

雪、本田を見る。

雪「お、男？」

ハル「だったら何よ」

ハル、雪を睨む。

雪「い、いえ……」

ハル「……ブンちゃんに会わせて」

雪「は、はぁ……」

× × ×

テーブルの上に置かれた骨壷。

ハル、手を合わせている。

ハル「（泣き出して）ブンちゃん……」

雪「（こそっと）えっと、何者ですか？」

本田「ブンと俺の高校ん時からのダチ」

雪「女性ですか？　男性ですか？」

本田「一応、男」
雪「あの格好は？」
本田「ゲイバーで働いててさ」
雪、ため息をつく。
雪「（ボソッと）昔の女かと……」
本田「え？」
雪「いえ何でも」
泣きじゃくっているハル。
本田、ハンカチをハルに差し出す。
本田「ほら、春彦」
ハル「ハルよ！」
ハル、ハンカチを奪い取って勢いよく鼻をかむ。
ハル「ブンちゃんが死んじゃうなんて……」
ハル、骨壷を見つめる。
ハル「ボトルだって残ってるのよ……」
ハル、再び泣き始める。
本田「よくブンと春彦の店に飲みに行ってたつけ」
雪「あ、ブンさん二丁目とか行くんですね」
本田「まぁ春彦がいる時はね」
ハル「そうだったわね」
ハル、鼻をすする。
雪「ブンさんと高校時代のお友達」
ハル「えぇ」
ハル、目の下をハンカチで拭く。
マスカラが落ちてパンダ目になっている。
ハル「ブンちゃんは昔っからかっこよくてね。男子校だけどモテて……」
本田「春彦みたいなやつになな」
ハル「あたしが一番仲良しだったわよ」
雪「ブンさん男子校だったんですね」
本田「そ」
ハル「あんた何にも知らないのね」
むっとする雪。
本田「（ハルを指差して）こ、こいつ口悪くてさー！　ごめんな！」
雪「いえ別に」
ハル「ブンちゃんの彼女がどんなのか見に来

れば……」

ハル、雪をじろっと見る。

警戒する雪。

ハル、鼻で笑う。

ハル「こんなのか」

雪、眉をひそめる。

本田「ご、ごめんなー、雪。こいつブンのこと好きだったからさ」

ハル「あたしのがよっぽどブンちゃんにお似合いだった」

本田「おいこらっ、バカ」

ハル「大体何であんたとこにブンちゃんのお骨あるのよ」

雪「はい？」

本田「そりゃあ彼女だから」

ハル「しかも何？　あんたこのまんま置いてるわけ？」

雪「え、ダメなんですか？」

ハル「仏壇も置かないでお供え物もしないで……。木彫りの熊とかじゃないんだから

ね！」

本田「おい春彦……」

ハル「ハルよ！」

ハル、雪を睨む。

ハル「雑に扱って……。こんなんだったらお墓に入れてあげなさいよ！」

本田「いやそれはさ。ほら、ブンのとこもいろいろあるから……」

ハル「でも！　このままじゃブンちゃんがかわいそうよ！」

ハル、立ち上がる。

ハル「大体、何でブンちゃんが死ななきゃいけないのよ！」

涙が溢れてくるハル。

ハル「一緒に暮らしてるんだったら、あんたがちゃんと見てれば……。ブンちゃんは死なかったんじゃないの？！」

本田「そんなわけねぇだろ」

本田、チラッと雪を見る。

表情を変えない雪。

本田、雪の肩に手を置く。

本田「雪、なんか変なこと考えんのはやめろよ？」

ハル「だってそうでしょう？　ブンちゃんが死ぬなんてありえないんだから！　あんたのせいで！」

本田、立ち上がりハルを抑える。

本田「落ち着けって」

ハル「ブンちゃんのこともよく知らないで！　ほんとはブンちゃんのこと好きじゃなかったんじゃない？」

雪、ハルの顔をじっと見上げる。

ハル「何であんたがのうのうと生きてんのよ！　あたしだったら後を追うくらいするわよ！」

本田「春彦！　お前いい加減に――」

雪「ポンさん」

本田、ハッとして雪を見る。

雪、本田を見てにっこり笑う。

雪「いいですよ」

本田「でも」

雪「大丈夫ですから」

雪、立ち上がる。

ハルをまっすぐ見る。

雪「うっせー、ブス」

ハル「……はぁ？！」

本田「ゆ、雪？」

雪「何で急に押しかけてきたお前につべこべ言われなきゃなんないんだよ！」

雪、ハルの肩を押す。

雪「帰れよ！　出てけ！」

ハル「何すんのよ！」

雪「うるっせぇ！　帰れ！」

本田「ゆ、雪！　落ち着けって」

雪「あんたも帰れ！」

雪、本田とハルの身体を押す。

ハル「ちょっ！　痛い痛い！」

本田「ゆ、雪ってば！」

雪、本田とハルを玄関に追いやる。

ドアを開け本田とハルを外に追い出

す。

本田「雪！」

雪、台所に走る。

本田、慌てて中に入ろうとする。

雪、塩を持ってきて本田とハルに投げつける。

ハル「キャー！　何よ！」

本田「ちょっ！　雪！」

雪「出てってよ！」

涙を流している雪。

体当たりして本田とハルを外に追い出す。

二人の靴を外に投げ出す。

ハル「ちょっと！　ブスって言ったの取り消しなさいよ！」

本田「雪！」

雪、乱暴にドアを閉め鍵をかける。

ハルの声「何なのよ！　もうっ！」

ドタドタと足音が聞こえる。

本田の声「春彦！」

追いかける足音が聞こえる。

力が抜けてしゃがみ込む雪。

雪「（泣きながら）ううううう……！」

しゃくりあげて泣く雪。

近づいてくる足音が聞こえる。

本田の声「雪！」

雪、慌てて手で口を塞ぐ。

本田の声「ほんとごめん……。今日はとりあえず帰るから」

声を押し殺して泣く雪。

本田の声「また来るな。……ほんとごめん」

走っていく足音。

雪「ううう……！」

雪、声を出して泣き始める。

テーブルの上の骨壷が目に入る。

雪「私だって……」

雪、自分の太ももを殴る。

雪「……ブンさん！」

雪、骨壷に駆け寄る。

蓋を開け遺骨を取り出す。

雪「ブンさん……」

雪、遺骨を口に運ぼうとした瞬間、手が止まる。

まじまじと遺骨を見る。

一部が青く変色している。

雪「えっ？！」

×　×　×

雪、スマホをテーブルの上に置く。

画面には『遺骨にカビが生えたら』というホームページ。

床には封が開いた海苔のパッケージやせんべいの袋が散らばっている。

雪、乾燥剤を骨壷の中に入れる。

雪「広がってなくてよかった……」

雪、骨壷の蓋を閉じる。

マスキングテープで蓋の周りをぐるぐるに止める。

ため息をつき骨壷を撫でる。

雪「ごめんね、ブンさん……」

雪、膝を抱える。

雪「ごめんなさい……」

俯いて泣き出す雪。

○公園（夕）

ベンチに座ってスマホをいじっている雪。

横に買い物袋が置いてある。

スマホ画面に群馬の市外局番の電話番号。

じーっと画面を見つめる雪。

指が震えている。

スマホの電源を切る。

大きくため息をつき目を閉じる。

頭を乱暴にかく。

○アパート・正門前（夕）

草取りしている富美子。

買い物袋を下げた雪、歩いて来る。

富美子、気づいて、
富美子「おかえりなさい、雪ちゃん」
雪「ただいまです」
雪、歩いて行こうとする。
富美子「あ、雪ちゃん」
雪「はい」
富美子、雪を手招きする。
富美子「おいで」
雪「はい？」

○同・裏庭（夕）
雪「迎え火？」
富美子「そう」
富美子、地面に置いたおがらと草にチャッカマンで火をつける。
富美子「お盆でしょ？　だからご先祖様がうちに帰って来れますようにって目印になるの」
雪「あ、もうお盆でしたっけ」
富美子「そうよ。……早いわねぇ」
雪「そっか、もうそんなに日が経ってるんだ」
富美子「……最近ボーッとしてたから心配だったのよ、雪ちゃん」
雪「あ、あは」
富美子「ご飯は？　食べてるの？」
雪「食べてます」
富美子「夜は眠れてる？」
雪「ボーッとしてるのは生まれつきですからご心配なく」
雪、しゃがんで火を見つめる。
雪「煙が目印になるんですねぇ」
富美子「えぇ。ご実家ではやったことなかった？」
雪「うちはそうゆう習慣なくて」
富美子「そうなの」
雪「帰ってきてほしい人もそんないなかったです」
煙が雪の方に向かう。
咳き込む雪。
富美子「こっちおいで」

雪「（咳き込んで）はい」

雪、煙から逃げる。

富美子「お父さん、今年も帰ってきてねー」

雪、空を見上げる。

富美子「文一くんも帰って来るはずよ」

雪「まぁ、ブンさんはうちにいるんですけど」

富美子「それもそうね」

微笑む富美子。

富美子「文一くんは幸せね。ずっと雪ちゃんといるんだもの」

雪「……どうですかね」

雪、草を引っこ抜いて火に投げる。

燃えていく草。

雪「ブンさん、私といて幸せだったのかな。今も、一緒にいていいのかな」

雪、ブチブチと草を引っこ抜く。

雪「ブンさんといるのが私じゃなかったら、ブンさん今でも生きてたかな」

雪、草を火に投げる。

富美子「そんなこと、ないでしょう？　ね、雪ちゃん」

雪、手についた土を払う。

雪「ブンさんね、心筋梗塞だったんですよ」

富美子「心臓にご病気が？」

雪「いえ。なんか警察の人は急性心筋梗塞？って言って急になるものだって。でも体調不良とかはその前にあったかもしれないって」

富美子「そう……」

雪「私、全然気づかなかったなぁ。体調悪いとか、全然」

富美子「私だってそうよ？　文一くんと会ってても一緒に暮らしてたんですよ？　同じいつも通り、元気だって……」

雪「私は一緒に暮らしてたんですよ？　同じ布団で寝て、顔合わせてご飯食べて。なの に……」

雪、草を引っこ抜く。

雪「私のせいだ」

うんうんと頷く雪。

雪「私のせい」

富美子「雪ちゃんのせいなんかじゃないわよ」

雪「じゃあ誰を恨めばいいんですか？」

雪、富美子を見つめる。

雪「誰のせいですか？　ブンさんは誰のせいで死んだんですか？」

富美子「誰のせいでもないわ」

富美子、置いてあったボロボロのビールケースに腰掛ける。

富美子「私もね、お父さんを亡くした時、自分を責めたわ。なんでもっと早く病院に連れて行かなかったんだろう、なんでもっと健康的なご飯を作れなかったんだろう、って」

富美子、火を見つめる。

パチパチと燃える火。

富美子「お父さんが亡くなったのは私のせいだって、強く思ったわ。それで苦しくなって、今度は人を責めた」

富美子、富美子、ためを息をつく。

富美子「ベテランのお医者さんだったら、娘が違う病院を探してたら、孫がもっとお見舞いに来てたら……」

富美子、笑って、

富美子「ひどいばあさんでしょう？」

富美子、手をさする。

富美子「お父さんを亡くしたばかりの頃はそんな恨みの感情でいっぱいだった。それで自分自身を苦しめてたのね」

富美子、富美子、雪に微笑む。

俯いている雪。

富美子「でもね、ある日気づいたの。それはいらない感情だって。もう死んでしまったのだから仕方ない、と言ってしまえばそれまでだけど、それだけじゃなくてね」

富美子「恨みじゃ私は生きていけない」って気づいた」

富美子、雪、顔を上げ富美子を、見る。

富美子、雪の方を向く。

富美子「雪ちゃん、人生に恨みという感情は

必ずしも必要ではないの。恨みから力を生み出して生きる人も中にはいるわよ？で

も雪ちゃんは違うと思うの」

富美子「雪ちゃんは、幸せな思い出で生きていいのよ」

雪「幸せな思い出？」

富美子「文一くんと一緒に暮らしていて、あなたは幸せだったでしょう？」

雪「私は、そうですけど、でもブンさんは……」

富美子「これから生きていかなくちゃいけないのはあなたなの」

富美子、雪の手を取る。

雪の手についた土を払い、優しく握る。

富美子「幸せな思い出を胸に、あなたはこれから生きていくの。恨みなんかは捨てていいの」

雪「いいんですか？」

富美子、頷く。

雪「だって、私」

富美子「いいのよ。文一くんの思い出だけ、絶対に捨てちゃダメよ」

富美子、雪の手を強く握る。

雪、空を見上げる。

空に昇っていく煙。

雪、富美子の方を見て頷く。

微笑む富美子。

車がいてくる音が聞こえる。

車が停車する音。

ドアの開閉音が聞こえる。

英二の声「ばあちゃーん！　来たよー！」

富美子「あっ、はぁい！」

富美子、立ち上がろうとする。

雪、富美子の身体を支える。

富美子「ありがとう」

富美子、バケツの水を迎え火にかける。

ジュッと火が消える。

富美子「今日はね、娘夫婦と食事に行くの」

雪「いいですね」

富美子「お父さんが好きだったお店にね、み

んなで行くの」

雪「楽しんできてください」微笑む富美子。

富美子「ありがとうね」富美子、歩いて行く。

英二の声「ばあちゃーん！」

富美子「はぁい！　今行きますよー！」

雪、富美子の背中を見送る。

ゆっくり深呼吸する。

○同・雪の部屋

チャイムが鳴る。

雪、ドアを開ける。

立っている本田。

本田の後ろに人影。

本田「よっ」

雪「ポンさん」

本田、後ろをチラッと見る。

本田「おい」

ハルの声「分かってるわよ」

本田「ほら、春彦」

本田、後ろからハルを引っ張る。

紙袋を持っているハル、服を整える。

ハル「ハルよ。もうっ」

対面する雪とハル。

雪、目をそらす。

ハル「あ、えっと……」

目を泳がせるハル。

本田、ため息をつく。

×　×　×

テーブルの上の骨壷。

蓋の周りにマスキングテープが雑に目立つ。

雪の前に正座しているハル。

ハル「この間は本当にごめんなさい」

ハル、深々と頭を下げる。

雪「いや、そんな……」

紙袋を持っている雪。

ハル「本当に、ひどいことを言ってしまって」
雪「そんな、私だって……」
ハル「本当に、本当にごめんなさい」
雪「あ、頭上げてください」
雪、紙袋の中をチラッと見る。
雪「お菓子まで頂いて……」
ハル「ほんの、お詫びの気持ちっていうか……」
本田「こいつも反省してるんだ。許して、くれる？」
本田、心配そうな顔で雪を見る。
雪「許すも何も、おあいこっていうか……」
雪、正座する。
雪「私も、ひどいこと言ってすみませんでした」
雪、頭を下げる。
雪「ハルさん、全然ブスなんかじゃないです。お綺麗です」
ハル、吹き出す。
ハル「（笑って）ありがとう」
微笑む本田。
ハル「……ずっと嫉妬してたのかもね、あんたに」
雪「私に？」
ハル「そう。ブンちゃんの彼女だから」
雪「そうなん、ですか？」
本田、うんうんと頷く。
ハル「そりゃあ羨ましかったわよ。だってブンちゃん、デコちゃんの話しかしないんだもん」
雪「え」
ハル、笑う。
ハル「ブンちゃん、酔っ払うといっつも『デコちゃん、デコちゃん』って」
本田「（笑って）そうそう」
雪「デコちゃ……」
雪、おでこを押さえる。
ハル「だから会ってみたかったのよね、あんたに」
ハル、骨壷を見つめる。
ハル「ブンちゃんは本当に……」

ハル、雪を見る。

ハル「あんたが好きだったのね」

×

×

×

パソコンで文字を打っている雪。

ふと手が止まる。

ウォークインクローゼットに向かう。

戸を開け、奥の方を探る。

ノートパソコンを取り出す。

見つめ、ステッカーを撫でる。

テーブルに置き、開く。

電源ボタンを押す。

パスワード入力画面。

雪、息を吐く。

『decochan』と入力する。

スタート画面が開く。

雪「何だよ……。デコちゃんって……」

雪、おでこを押さえる。

骨壷を見る。

雪「付き合った頃のあだ名じゃん」

○住宅街

歩いている本田とハル。

ずずっと鼻をすするハル。

本田、ハルにハンカチを差し出す。

本田「負けを認める？」

ハル「うるっさいわね」

ハル、ハンカチを奪い取る。

ハル「そもそも同じ土俵に立ててないわよ」

ハル、ハンカチで目を拭く。

ハル「負けとか勝ちとかそうゆうこと言えないくらい、ブンちゃんあの子にベタ惚れじゃない」

本田「そうだな」

ハル、ため息をつく。

ハル「あれが『デコちゃん』ねぇ……」

本田「そう」

ハル「何で『デコちゃん』なの？」

本田「おでこ出してたんだよ。こうやって」

本田、前髪を手で結んで見せる。

本田「出会った頃は髪長かったからさ、邪魔なんなないようにおでこ丸出しだったんだよ、あいつ」

ハル「だから『デコちゃん』ねぇ」

本田「そ」

ハル「（笑って）ブンちゃん、そんな甘ーいことするのね」

本田「な、意外だよな。最初聞いた時はドン引いたよ」

ハル「そんなことする人じゃないと思ってたのに」

本田「俺らの知らないブンがいるってことだよ」

歩いていく本田とハル。

雪（N）「ブンさんが忘れなかったのを、忘れていたのは私だった」

○アパート・雪の部屋（朝）

スマホのアラームが鳴る。

布団で眠っている雪。

スマホに手を伸ばし眠ったままアラームを止める。

雪「うーん……」

雪、布団の中で伸びをする。

伸ばした手が枕元の骨壷に触れる。

雪「冷たっ？！」

雪、バッと起き上がる。

手をさすりながら骨壷を見る。

雪「あ、ごめん。寒かったよね」

雪、テーブルの上の桐箱を手に取る。

スウェットの袖を伸ばして骨壷を持つ。

ゆっくりと桐箱の中に入れる。

雪「よしっ、これで湿気対策は完璧！」

ニコッと笑う雪。

雪「朝ごはんにしよっ」

雪、毛布を被り台所に向かう。

○同・玄関前（朝）

雪、出てくる。

新聞を持った富美子、歩いてくる。

雪、鍵を閉める。

富美子「あら、雪ちゃん。おはよう」

雪「おはようございます」

富美子「随分と早いお出かけね」

雪「あー、朝のバイト入ってて」

富美子「そう。今日も寒いからあったかくしてね」

雪「はい、ありがとうございます」

富美子「もう冬なのね」

雪「早いですよねー」

富美子「じゃ、気をつけていってらっしゃい」

雪「いってきまーす」

雪、歩き出す。

雪「あ」

雪、立ち止まり、富美子に向かう。

雪「あの、家賃は帰ってから渡しますんで」

富美子「あぁ、はい」

雪「ほんと、すみません」

富美子「いいえ、大丈夫よ」

雪「今度から遅れないようにしますんで」

富美子「雪ちゃん」

雪「……」

雪「はい？」

富美子「キツくない？　大丈夫？」

雪「え？」

富美子「一人で暮らすには少し家賃が高いでしょう」

雪「あ、いやぁ……」

富美子「雪ちゃんだけだし、半分にしても……」

雪「そんなわけにはいきません！」

富美子「でも」

雪「バイトも増やしたし、大丈夫ですよ」

富美子「雪ちゃん……」

雪「じゃ、いってきまーす」

雪、歩き出す。

富美子「あんまり無理しちゃダメよー」

富美子、雪の背中を見送る。

○住宅街（朝）

歩いている雪。
強い風が吹く。

雪「うー！　寒！」
鼻をすすり歩く雪。

雪（N）「もうすぐ、ブンさんが死んで初めての冬が来る」

○出版社・会議室
向かい合って座っている雪と葉山。

葉山「はい、じゃあこんな感じで」
雪「はい、よろしくお願いします」
ノックの音。
葉山「はい？」
神田、入ってくる。
神田「お疲れ」
雪「お疲れさまです」
葉山「神田さん。どうしたんですか」
神田「いやどんな感じかなと思って」
葉山「心配しなくても大丈夫ですよ、雪山先生は」
神田「いや葉山が」
葉山「え？」
雪「なんとかやってますよ」
神田「そう？　ならいいんだけど」
葉山、ハッとして、
葉山「あ、そうだ。次回の打ち合わせなんですけどまた昼とかの方がいいですよね？」
雪「あ、えっと」
雪、スマホを見る。
雪「んーと、夕方にしてもらえます？」
葉山「了解です」
葉山、スケジュール帳を開いて書き込む。
神田、葉山のスケジュール帳を覗いて、
神田「あれ？　木曜ってバイト休みじゃ……」
雪「コンビニのバイトも始めたんです」
葉山「お金ないんですか？」
雪「えっと……、まぁ」
神田「体調は？　大丈夫なの？」
雪「大丈夫です、大丈夫です」

○アパート・雪の部屋

キーボードを打つ音が響く。

テーブルの上に桐箱。

パソコンと向かい合っている雪。

ため息をつく。

チャイムが鳴る。

雪、ハッと玄関の方を見る。

チャイムが鳴る。

雪「はーい？」

雪、玄関に向かう。

ドアスコープを覗くと、男の姿が見える。

首を傾げる雪。

チラッとテーブルの上の桐箱を見る。

雪「どちら様ですか？」

男の声「佐藤と申します」

雪「佐藤……？」

雪、桐箱の方を見る。

靴箱から男物のスニーカーを出し、玄関に置く。

ドアスコープを覗く。

男の声「……文一の伯父です」

雪「え……」

× × ×

テーブルの上に置かれた骨壷。

床に桐箱が置いてある。

佐藤進（58）、骨壷に手を合わせている。

台所でうろうろしてる雪。

鍋に水を入れ火にかける。

戸棚を開け中を覗く。

冷蔵庫を開け中を覗く。

雪「（ボソボソと）お茶、お茶……」

雪、棚を開け中を探る。

雪「（ボソボソと）コーヒー、コーヒー……」

雪、奥からスティック状の袋を取り出す。

ぱっと笑顔になる。

が、手に取ったのはスポーツドリンクの粉末。

眉をひそめる雪。

×

×

×

骨壷を見つめる佐藤。

雪「あ、あの」

雪、湯呑みを持ってくる。

佐藤「あ、お気遣いなく」

雪「い、いえ……」

雪、佐藤の前に正座する。

雪「あっ、えっと、白湯です……」

雪、サッと湯呑みを差し出す。

佐藤「……ありがとうございます」

雪「あっ、いえっ、あはは……」

佐藤、ズズッと白湯を飲む。

雪「あ、今日は新幹線で？」

佐藤「ええ」

雪「そ、そうですか」

佐藤「……」

沈黙が流れる。

雪「な、なんか食べますか？」

佐藤「お気遣いなく」

雪、立ち上がろうとする。

雪「すみません」

雪、座る。

佐藤「……今日伺ったのはですね」

雪、緊張して佐藤を見る。

佐藤「実は、文一の遺骨を引き取りたいと思いまして」

雪「え？」

佐藤「文一が死んでもうすぐ半年になるでしょう？　それなのに墓にも入れてないのを親戚に言われましてね」

雪「えっと……」

佐藤「群馬の墓に入れたいと思います」

雪「……それは私に渡せと言っているんですか？」

佐藤「そうなりますね」

雪「私に手放せと？」
佐藤「はい」
雪「え……」
雪、骨壷を見る。
佐藤「いつまでもこのままではいけないと思うんです」
雪「私はこのままでも全然」
佐藤「そうじゃなくて、ほら、世間的に」
雪「はい？」
佐藤「文一は一応長男ですし、家を出て行ったとはいえ墓石に名前がないのはちょっと……」
雪「世間体のために引き取るということですか？」
佐藤「えっと……」
雪「（むっとして）でしたらこれまで通り、私が持っています」
雪、骨壷を桐箱に入れる。
雪「そもそも引き取り手がなくて私が連れて帰ったんです」
雪、桐箱を佐藤から離す。
佐藤「……あまり揉めたくはないんですよね」
佐藤、雪を見る。
胸元から封筒を取り出す。
佐藤「心ばかりですが」
佐藤、封筒を床に置く。
雪「はい？」
佐藤「お納めください」
雪「何のつもりですか？」
佐藤「今まで遺骨を預かっていただいたお礼です」
雪「お礼って……」
雪、封筒を佐藤に突きつける。
雪「結構です。私は文一さんと家に帰ってきたというだけなんで」
佐藤「金額はお話次第で」
雪「は？」
雪、佐藤を睨む。
雪「売れっていうことですか？」
佐藤「解決できるならお金を使うということ

です」

雪「何だと思ってるんですか！」

雪、立ち上がる。

雪「世間体が悪いから墓に入れる？　ふざけないでください！」

荒い息遣いの雪。

佐藤「……今日のところはこれで失礼します」

佐藤、封筒をしまい、名刺を差し出す。

佐藤「私の名刺です。何かあればご連絡を」

受け取ろうとしない雪。

佐藤、テーブルの上に名刺を置く。

佐藤「失礼します」

佐藤、出て行く。

ドアが閉まる音。

雪、桐箱を抱きしめる。

○ゲイバー・店内（夜）

華やかな店内。

ダンスミュージックが爆音で流れている。

盛り上がっている客たち。

カウンター席に座っている雪と本田。

めかしこんだハル、カウンター内にいる。

ハル「はい、生」

ハル、本田にジョッキを差し出す。

本田「ありがと」

雪「ハル姉、私はウーロン茶で」

ハル「ウーロン茶？　ウーロンハイじゃなくて？」

雪「ウーロン茶」

ハル「はいはい」

ハル、グラスにウーロン茶を注ぐ。

ハル「はいどーぞ」

ハル、グラスを雪に差し出す。

雪「どうも」

雪、グラスを受け取る。

ハル、グラスを持つ。

ハル「はい、じゃあ」

ハル・本田・雪「カンパーイ」

グラスを合わせて乾杯する三人。

男の声「ハルちゃーん！」

ハル「はぁい！」

ハル、カウンターから出て行く。

ハルの声「やだぁ、来てくれたのー！」

本田「なんだ飲まないの？」

雪「明日も朝からバイトなんで」

本田「またバイト増やしたのか」

雪「はい」

本田「お前あんま体強くないんだから。体は壊すなよ」

雪「はーい」

本田「……キツイのか、生活」

雪「いやカツカツってわけじゃないですけど」

本田「もともとブンと家賃とか折半だったんだろ？　倍になってキツイんじゃないのか？」

雪「ちょっとは、まぁ……」

本田「……」

本田、尻ポケットから財布を取り出す。

雪「は？」

本田「飯食わなくなってもあれだし……」

雪「ポンさん、ぶん殴りますよ」

本田「ご、ごめん……」

雪「私のことよく分かってるくせに」

本田「悪かった。そうだよな」

本田、財布をしまう。

本田「じゃ、別のとこに引っ越したらどうだ？」

雪「引っ越し？」

本田「あの部屋じゃ一人暮らしには向かないだろ」

雪「うーん……」

本田「ブンと住んでた部屋だから出て行きたくない？」

雪「いや、なんというか。大家さんもいい人だし？　駅もスーパーも近いし」

本田「他にもいい条件のところあるよ。俺も探すから」

雪「うーん……」

本田「もっと家賃が安いとこ探した方がいい

ほら、俺たちみたいなクリエイターは。

雪「そうですけど」

本田「ブンの遺骨は雪と一緒なんだから、どこ行っても いいだろ」

雪「ブンさんの伯父さんが来ました」

雪、グラスの氷を指でつつく。

本田「群馬の？」

雪「はい。お葬式の時から初めて来て手合わせてました」

本田「何で急にまた」

雪「ブンさんを渡せって」

本田「お墓に入れたいんだそうです」

雪「世間体が悪いからって」

本田「ほんとあそこは…」

本田、ため息をつく。

本田、雪を見つめる。

雪、ブンのとこはさ…」

本田「なんとなく分かりますよ」

雪「お葬式での空気感？　っていうか。そういうのでかりましたよ？　どこも一緒なんですね」

本田「ブンもいろいろ苦労したからな」

雪「だろうなって思いました。ブンさん何も言わなかったけど」

本田「…どうするんだ？」

雪「渡すわけないじゃないですか」

本田「だよな」

ハルの声「ちょっと」

雪、振り返る。

仁王立ちしているハル。

ハル「今ブンちゃんのお骨を渡すとか渡さないとか話してなかった？」

本田「聞いてたのか」

ハル、雪に顔を近づける。

雪「ハル姉」

ハル「いい？　絶対に渡しちゃダメよ？」

ハル「あたしはあんたんところだから安心できんの。よく知らないところにブンちゃんがいるなんて耐えらんないわよ」

ハル、雪の肩を掴む。

ハル「いいね？　雪。ブンちゃんを苦しめてきた奴らのとこになんか渡しちゃダメ」

雪「うん……」

ハル「いざとなったらあたしを頼んな」

本田「春彦が何すんだよ」

ハル「バーの仲間引き連れてすぐ駆けつけるから」

本田「そりゃ地獄絵図だな」

ハル「どうゆう意味よ」

本田「いや」

ハル「ちょっとみんなー？　ポンちゃんが！」

本田「バッカ、お前やめろ！」

男の声「なにーなにー？」

男の声「やだぁー！　ポンちゃんじゃなーい！」

本田の元にわらわら人が集まってくる。

本田「ゆ、雪！」

笑っている雪。

○アパート・正門前

雪、歩いてくる。

雪の部屋の方を見ている佐藤と国塚（48）。

佐藤、雪に気づき会釈する。

雪、佐藤を睨む。

雪「何ですか」

雪、佐藤に詰め寄る。

雪「何度話されても同じです」

国塚、雪の前に立ちはだかる。

雪「な、誰ですか」

国塚「国塚と申します」

国塚、雪に名刺を差し出す。

まじまじと名刺を見る雪。

国塚「弁護士をしています」

雪「べ、弁護士？」

雪、佐藤を見る。

佐藤「言いましたよね？　揉めたくないって」

雪「べ、弁護士なんか連れてきてどういうつもりですか」

佐藤「どうこうしようってことじゃないんですよ」

国塚「えぇ。まだ」

雪、眉をひそめる。

国塚「話が平行線になりそうということだったのでご相談を受けましてね。ほら、第三者がいる方がうまく話が進むこと、ありますでしょう？」

雪「他人がいたって同じです」

国塚「他人はあなたでしょう」

雪、キッと国塚を睨みつける。

国塚「文一さんとのご関係は？」

雪「だから恋人です」

国塚「ご結婚は、されていないと」

雪「はい。だから？」

国塚「法律的にも世間的にも、他人、という

ことになりますよね」

雪「事実的には他人じゃありません」

国塚「婚約の意思が？　事実婚ということですか？」

雪「こ、婚約とかそういうのは……」

国塚「んー、他人である山本さんがご遺族の申し出を拒否する、というのはどうなんでしょう」

雪「何ですか？　犯罪なんですか？」

国塚「いえ、犯罪ではないですよ。ただ、十分争う余地はある、ということです」

雪、佐藤を睨む。

何食わぬ顔をしている佐藤。

国塚「裁判、となると結構な費用がかかりますからねぇ。小説家というのは収入が安定しないんだとか」

雪、国塚を睨む。

国塚「あっ、脅しじゃありませんよ？　もし

もの話をしたまでです。そんな怖い顔しな

雪「いでくださいー」

国塚「もともとこういう顔ですー」

国塚「そうでしたかーー」

国塚「にこにこしている国塚。

国塚「それに山本さんー」

国塚、咳払いをする。

国塚「ご遺骨を雑に扱ってるだとか」

雪「雑になんてしてませんー！」

国塚「テープでぐるぐる巻きにしてるんでしょう？」

雪「あれはカビが||ハッとして口を押さえる雪。

国塚「カビ？」

雪「し、湿気が入らないようにしてるだけです」

国塚「……山本さん。ご仏壇も用意されてないんですよね？」

雪「それが何か」

国塚「群馬のご実家には先祖代々のご仏壇があります。お墓も立派なもので」

雪「仏壇とかお墓とか、そんなに必要なものですかね？」

国塚「亡くなった故人を弔うためです」

雪「今更？」

雪、鼻で笑う。

雪「お葬式だって形だけのものだったのに、弔う？　本気で言ってるんですか？」

国塚「文一さんの、実のお母様の願いです」

雪「ブンさんのこと半年……、ずっとずっとほったらかしたくせに！」

国塚「昔の話でしょう？」

雪「だから部屋から出て来る。

富美子「富美子、部屋から出て来る。

富美子「雪ちゃん？」

富美子、雪に駆け寄る。

息遣いが荒い雪。

富美子、慌てて雪の肩を抱く。

佐藤たちをぎょっと見て、

富美子「あなたたち、何なんですか？」

佐藤「あなたは？」
富美子、胸を張って、
富美子「こ、このアパートの大家ですが？」
佐藤「ご挨拶遅れて申し訳ありません。私、文一の伯父の佐藤と申します」
富美子「文一くんの？」
佐藤「生前は文一がお世話になりまして」
富美子「い、いえ……」
富美子、雪を見る。
佐藤たちを睨んでいる雪。
富美子「何かご用件が？」
国塚、にっこりして名刺を差し出す。
国塚「弁護士の国塚、と申します」
富美子「弁護士？」
佐藤「先生、今日は……」
国塚「はい。今日はこれで失礼します」
雪「二度と来んな！」
富美子「雪ちゃん」
富美子、雪の背中をさする。
佐藤たちの背中を睨みつける雪。

○コンビニ・休憩室（夜中）
段ボールが積み重なっている狭い休憩室。
弁当を食べている雪。
スマホをいじっている。
スマホ画面には仏壇販売のホームページ。
雪、ため息つく。
店長、入って来る。
店長「ごめん山本さん、レジ入ってもらっていい？」
雪「あ、はい」
店長「悪いね」
雪、立ち上がろうとする。
と、よろける。
尻餅をつく。
店長「山本さん！」
店長、雪に駆け寄る。
店長「大丈夫？」

雪「イテテ……。大丈夫です」
雪、腰をさすりながら立ち上がる。
店長「顔色悪いし、帰ったら？」
雪「ほんと、大丈夫なんで」
店長「いやでもさぁ」
雪「稼がないといけないんで」
雪、出て行く。

○出版社・デスク
電話している葉山。
葉山「はい、了解しました。明日ですよ？　明日までは待ちますから」
葉山、電話を切ろうとする。
もう一度受話器を耳に当て、
葉山「明日ですからね？！」
葉山、受話器を置く。
マグカップを持った神田、寄ってくる。
神田「どうした」
葉山「雪山先生、締め切り伸ばしてほしいって」
神田「珍しいな」
葉山「はい。なんでもバイトが立て込んでるとか」
神田「バイトで？」
葉山「先生には小説に集中してほしいんですけどねー」
神田「そうだなぁ……」
神田、コーヒーをすする。
葉山「あ、俺カフェオレで」
神田「んー？」
葉山「ん？」

○アパート・雪の部屋
布団に包まっている雪。
咳き込む。
雪「うー……」
マスクをつけた雪、布団から顔を出す。
台所に立っている本田の後ろ姿がぼんやりと見える。
顔を反対側に向けると、テーブルの上

に置いてある骨壷。
ゆっくり起き上がり骨壷を手に取る。
抱えたまま布団に潜る。
頬を骨壷にくっつける。

雪「あー、気持ち……」
本田「雪、お粥できたぞ」
雪「えー、食欲無いです」
本田「ちょっとでもいいから食え」
本田、どんぶりを持って来る。
本田「ったく、無理して働くからだ」
雪「だって」
本田「だってもへちまもない！」
雪「だって、仏壇欲しかったんだもん」
本田「仏壇？」
雪「仏壇があればブンさんだってずっとここにいるかなって」
本田「雪……」
雪、起き上がりどんぶりを見る。
雪「うわー、『ポンがゆ』」
本田「よくここで作ってたな」
雪「ブンさんいつも冬になると風邪引くから」
本田「雪は元気なのに食って」
雪「おいしそ」
本田「だろ？　ほら、食べな」
チャイムが鳴る。
ドアがノックされる。
佐藤の声「山本さん、佐藤です」
雪、布団に潜り込む。
本田、玄関の方を見る。
本田「（こそこそと）佐藤って？」
佐藤の声「山本さん」
布団の中でもそもそ動く雪。
雪「（ぼそぼそと）ブンさんの」
本田、慌てて手で口を塞ぐ。
佐藤の声「大事なお話があるんです」
雪、布団から顔を覗かせる。

○同・玄関前
佐藤、ドアをノックする。

返答がない。
ため息をつき、歩き出そうとする。
と、鍵の開く音。
雪、ドアを開け顔を覗かせる。
佐藤、会釈する。

○同・雪の部屋
佐藤「佐藤です」
本田「本田です。あの、文一くんとは高校からの友人で」
佐藤「そうでしたか」
本田、雪を見て、
本田「そんでそのまま二人の共通の知人っていうか」
骨壷を抱えている雪。
佐藤を睨みつけている。
本田「（こそこそと）こらっ、雪」
佐藤、頭を下げる。
佐藤「この間はすみませんでした。弁護士なんか連れてきて」
雪「私を訴えますか？」
佐藤「そんなことしません」
佐藤、雪の顔を見る。
佐藤「でも、どうしても文一の遺骨を墓に入れてやりたいんです」
雪「ブンさんは望んでないと思います」
雪、大事そうに骨壷を抱きかかえる。
雪「それどころか絶対に嫌がると思います」
佐藤「でしょうね」
雪、不審そうに佐藤を見る。
佐藤「でもこんな言い方はあれですけど、死んだ人間には関係ないじゃないですか。死んだ後は結局、生きている人のエゴで葬式なんかするんだから」
雪「それは……そうですけど」
佐藤「生きている人間の、心を落ち着かせるために葬式をする、お墓を作る。そういう面があると思うんです。だから文一がどうとか、今はもう関係ないと思いますって思ってるんだから」
もう死んでるんだから」
せんか？

本田、心配そうに雪の顔を見る。

雪、ぎゅっと拳を握りしめ佐藤を真っ直ぐ見つめる。

雪「でも、だから、嫌なんです。私がブンさんのそばにいたいんです」

本田「雪……」

佐藤、姿勢を正す。

佐藤「敦子……妹（言い直して）文一の母親が、遺骨を墓に入れたいと言い出したんです」

雪「世間体のために？」

佐藤「もちろんそれもありますが……」

雪・本田、顔を見合わせる。

佐藤「実は、病気をしてまして」

本田「えっ……」

雪「……だったら何だって言うんですか」

本田「（諭すように）雪」

佐藤「さっきも言った通り、生きている人間のエゴです。お恥ずかしい話、文一には肩身の狭い思いをさせてきました。家なり庭でも居場所がなかったと思うんです。どうも家族と折り合いが悪くて」

雪、咳をする。

佐藤「家出同然で東京に行って、私たちも連絡を取ろうともしないで……」

雪「ずっとほっといたわけですね」

佐藤「それで急に文一が亡くなったって知らせを受けて……。和解をしようともしなかったこと、妹は大変悔やんでるんです」

雪「遅いと思います」

佐藤「十分、私たちも分かってます」

雪「遅すぎると思います」

佐藤「でも、文一を墓に入れることで少しは妹の心が軽くなると思うんです」

雪「ほんと、勝手ですね」

佐藤「何を言われても仕方ありません」

佐藤、頭を下げる。

佐藤「お願いします。妹に、文一への償いをさせてください。これが、最後になると思うんです」

雪、佐藤から目をそらす。

本田「ご容態、悪いんですか？」

佐藤「文一が亡くなってからはどんどん悪化して……。たぶん兄の私より先に……」

本田「そんな……」

雪、咳き込む。

本田、雪の背中をさする。

雪「あー、頭痛……」

本田「……佐藤さん、雪の体調もこんなですし、今日のところは」

雪「外で待ってください」

本田「え？」

雪「ポンさんと少し話します」

○同・正門前

立っている佐藤。

寒そうに手をすり合わせる。

○同・雪の部屋

本田、窓の外を見る。

本田「外寒いぞ」

布団をかぶってしゃがみ込んでいる雪。

骨壷を抱きかかえている。

雪「今まで散々嫌なこと言われたんです。少しくらいの罰は受けてもらわないと」

本田、ため息をつく。

雪が抱えている骨壷を見る。

雪「どう思いますか」

雪、本田の顔を見る。

雪「お母さんのところに渡した方がいい？」

本田「俺が決めることじゃないよ、雪が決めることだよ」

雪「そうやって逃げるんですね」

本田「そりゃ逃げるよ。俺なんかに決められることじゃねぇし」

雪「どうしたらいいんですかね……」

雪、骨壷を抱きしめる。

雪「ブンさんならどうする？」

本田「ブン？」

雪「もしこれが、私だったら？」

雪、骨壷を撫でる。

雪「私が死んで、絶対無いとは思うけど、私の家族が私を引き取りたいって言ったら？」

本田「ブンなら……」

雪「そんで母親が余命短かったら？」

本田「……考えても仕方ないだろ」

雪「仕方ないけど、考えるしかないじゃないですか」

本田「ブンなら……」

雪「絶対渡しますよ。そういう人だから」

本田「だろうな……」

雪「バカにお人好しだから」

雪、骨壷を指で弾く。

コツンと音が響く。

雪「でも私は……」

本田「雪は、どうしたいの」

雪「離れたくない」

本田「うん」

雪「でも、それでいいのかな」

本田、骨壷を見つめる。

深呼吸して、

本田「……雪はきっと後悔すると思うよ」

本田、雪の目線に合わせてしゃがむ。

本田「雪。遺骨をブンの実家に渡そう」

雪「え」

本田「そんで、母親に十分反省してもらって、墓に入れてもらおう」

雪「渡す？」

本田「うん。この決断を、俺のせいにしていいよ」

雪「ポンさんは渡した方がいいと思うんですか」

本田「うん。渡さなかったら雪は自分を責めることになると思う。お前も十分、バカにお人好しだぞ？」

本田、笑って雪の頭をポンポンする。

本田「そんで、雪がいつか渡したことを後悔したとき、俺を恨めばいい」

雪「私は、誰かを恨みませんよ」

本田「さぁ、俺の答えは言った。あとは雪が乗っかるかどうかだ」

雪「……ブンさんなら、どうする？」

雪、骨壷を抱きしめる。

○同・正門前

タクシーが停まっている。

佐藤「ありがとうございます」

佐藤、頭を下げる。

手には桐箱。

佐藤「納骨が済んだらご連絡します。墓参りに来てやってください」

本田「はい」

佐藤「雪さん」

佐藤、雪を見つめる。

俯いている雪。

佐藤「本当にありがとうございます。妹のために」

佐藤、頭を下げる。

雪、目を伏せたまま会釈する。

本田、桐箱を見て、

本田「あの、よろしくお願いします」

本田、頭を下げる。

佐藤「はい。本当に、ありがとうございました」

佐藤、頭を深々と下げる。

雪、佐藤が持つ桐箱をじっと見つめる。

佐藤、タクシーに乗り込む。

本田、頭を下げる。

出発するタクシー。

本田「雪、中に入ろう。風邪がひどくなったらまずい」

じっとタクシーを見送る雪。

本田「雪？」

雪「ブンさん……」

雪、ヨロヨロと歩き出す。

雪「ブンさん！」

雪、走り出す。

雪「ブンさん！」

フラフラになりながら走る雪。

どんどん離れていくタクシー。

雪「ブンさん！」

本田、雪に駆け寄り後ろから抑える。

本田「雪」

雪、本田の腕から離れようと暴れる。

雪「ブンさん！」

本田「雪」

雪「ブンさん！」

本田「雪！」

本田、雪の肩をつかむ。

本田「ブンはもう死んだんだよ！」

雪をまっすぐ見つめる本田。

雪、力が抜けてしゃがみ込む。

雪「ブンさん……」

涙を流す雪。

本田、雪の目を見つめる。

本田「いいか？　雪。ブンはもう死んだ」

雪「分かってる」

本田「あれは骨だ！　ブンが死んで、肉が焼かれて残った、骨だ！」

涙で顔がぐしゃぐしゃの雪。

本田「（声が震えて）ブンじゃないんだよ……」

本田の頬に涙が流れる。

本田「ブンはもういないんだ……」

雪「う、うわああああ！！」

思い切り泣く雪。

雪「ブンさん、ブンさん……！」

本田「ブンが生きているときに、最後に過ごしたのが雪でよかった」

本田、涙を流しながら微笑む。

雪「うわああああああ！」

声を上げ泣き続ける雪。

静かに涙を流す本田。

○アパート・正門前

晴れていて天気がいい。

駐車してある軽トラ。

食器棚や段ボールが積んである。

ハル、段ボールを運んできて軽トラに積む。

ハル「はぁっ！　あっつい！」
ハル、タオルで汗を拭く。
ハル「化粧落ちちゃうわよ、もうっ」
本田「いやぁ、春彦がいて助かった」
ハル「ハルだってば！」
雪、段ボールを持って来る。
雪「ハル姉」
ハル「うん？」
雪「これも」
雪、ハルに段ボールを渡す。
ハル「お、重っ！」
雪「よろしくでーす」
ハル「ったく、人使い荒いわねぇ。新人賞なんて取るとやっぱ人って変わるのかしら」
本田「雪山大先生っ」
雪「（はにかんで）やかましいです」
ハル、段ボールを軽トラに積む。
富美子「雪ちゃん！」
富美子「富美子さん」
富美子「これ、よかったら食べて」
富美子、雪に紙袋を渡す。
雪「ありがとうございます」
雪、紙袋の中を覗く。
富美子「おはぎ。車の中ででもみなさんと食べて」
ハル「あらやだありがとうございます」
本田「ありがとうございます」
富美子「いいえー」
雪「富美子さん、今までお世話になりました」
雪、頭を下げる。
富美子「雪ちゃん……」
涙が溢れる富美子。
富美子「元気でね？　体に気をつけて」
雪「富美子さんも」
富美子、笑って涙を拭う。
富美子「寂しくなるわ。雪ちゃんは娘みたいなものだから」
雪「富美子さん……」
富美子「これからも、いつでも遊びに来てち

ようだいね」

雪「はい」　富美子、雪の手を握る。

雪「富美子さんも、私のおばあちゃんみたいでした」

ハル「そこお母さんじゃないのね」

笑う一同。

本田「雪、もう忘れ物ないか？」

雪「あ、じゃあもう一回見てこようかな」

本田「おう」

雪、駆けていく。

○同・雪の部屋

雪、入ってくる。

空っぽになった部屋。

窓から光が差し込んでいる。

部屋を見渡す雪。

雪「……行こうか」

雪、出て行く。

バタンと閉まるドア。

【終】